

平松君との思い出 ～ 体育会との関係の始まり ～

木村 浩 造

関西学院中学部入学(1960年)以来の友人「平松一夫」君が、2020年12月2日、コロナ禍の中で亡くなってしまった。60年の長きに及ぶ盟友を失い、悲しく寂しい思いで一杯です。関西学院にとっても大きな柱を失ったのではないかと思います。

彼との一番の思い出は、約50年前に起こった大学紛争解決に向け共に尽力したことです。節目、節目で関係がありました。中学部3年時には生徒会役員として一緒に活動し、高等部から大学に進む際は、「これからは理論より実践が必要。一緒に商学部に行こう」と誘われ、経済学部をやめて商学部に進学しました。紛争解決後の卒業近い頃には、「学校に残って一緒にやれないか」と誘われましたが、内定していた住友金属工業㈱を断ってまで学校に残る気になれず断りました。卒業3年目に結婚しましたが、平松君に司会をしてもらい、媒酌人は敬愛する矢内正一先生にお願いしました。締めで、多くの関学同窓と校歌を歌いました。

彼と私は中学部時代に矢内先生の薫陶を強く受けました。それが彼の教育者としての原点になっています。彼は商学部で会計学を専攻し、学究一筋の学生生活を送り、青木倫太郎先生の平均点記録を破る最高点で首席卒業しました。私は矢内先生の教え通り、文武両道を目指し、中・高・大と陸上競技部で主将を務め、全国レベルの戦績を残しました。学業面では到底彼の足元には及びませんが、ほとんどの科目が優でした。

大学紛争の思い出はいろいろあります。きっかけは、中学部時代の恩師から紛争解決に力を貸してほしいと要請を受けたことでした。私は平松君に声を掛け、2人で協力して組織化を進め、紛争解決に尽力しました。当時の小寺武四郎学長は、全共闘に監視され、学校に来ることができませんでした。先生の親戚の方のマンションの一室に集まり、3人で議論したのは懐かしい思い出です。

紛争解決に当たっては、体育会系学生の非暴力の平和的活動と、体育会OBによる物心両面からの支援が大きな力となりました。当初、同窓会の小原完三専務理事宅を集会場として、解決策を検討しましたが、レスリング部OBで「美々卯」の薩摩卯三郎先輩から同社の仁川寮を提供していただき、そこで合宿したことで、平松君は体育会学生や体育会OBとの交流が深くなりました。関西学院大学体育会が、部の大小を問わず、現役とOBとの強い絆により良き伝統を守っていることを、紛争を通じて彼も実感したものと思います。

紛争当時の体育会OB会長は相撲部OBの木村正春先輩でした。心配して何度も顔を出され、OB会への支援カンパについてもお骨折りいただきました。現役が困っている時に支援するのがOBの役目です。しかし、今回のコロナ禍という困難な状況の中、現在の体育会OB会は困惑する現役学生を積極的に支援することをせず、コロナ禍だから何もできないと静観するだけの、実に情けない状況にあります。平松君が元気なら、現役支援策について何らかの相談ができたかと思いますが、残念です。

大学紛争後途絶えていた「スポーツ推薦」は、平松君の努力もあって復活し、それなりに強くなった感がありますが、本当に彼が目指していた学生スポーツかどうか疑問に思います。また、本年度から体育会活動が「正課外教育」となったようです。競技種目だけがスポーツとされ、勝つことを優先した体育活動は、彼が本当に目指した「正課外教育」だったのでしょうか？ 私たち2人の共通の恩師、矢内中学部長(元関西学院理事長)の教えは、「スポーツはただ勝つだけが目的ではありません。強い



2019年体育会OB会総会が、平松君と会って話をした最後となってしまった。講師として参加されていた小池百合子東京都知事と一緒に撮影。



1970年卒業式後の商学部前。大学紛争解決に向け、一緒に活動した三木康彦君【左端】と一緒に撮影。50年を経て、2人とも亡くなってしまい、寂しい思いです。

[<次頁下へ>](#)



平松一夫先生を追悼して

神 田 健 次

平松一夫先生が逝去された旨をうかがい、心より哀悼の意を表します。学院において学長、理事長等、数々の重責を担われ、本当にお疲れ様でした。

現役時代、平松先生とは学部は異なりましたが、ほぼ同年代ということもあり、今田寛先生が学長の時の執行部において、また宗教活動委員会などで一緒に仕事をさせていただきました。写真は、1990年前後に千刈セミナーハウスで開催された宗教活動委員会の集いで、まだ若々しい先生が左手前に写っています【左から2人目が筆者】。もう一つ忘れられないのは、『関西学院百年史』（通史編と資料編併せて全4巻）の編集と執筆作業でした。1991年から98年まで7年間に及ぶ共同の編纂事業でしたが、完成した時に共に喜びを分かち合えたことは大切な思い出となっています。その『百年史』をコンパクトにして共同刊行したのが『関西学院事典』（2001年、増補改訂版2014年）でした。この『事典』は、全国の学校でも先駆的な意義を持っていたと思います。さらに、『百年史』編集をベースに、1995年から「関学学」を学部の垣根を越えて、総合コースとして共同で開講しました。平松先生が学長の時、大教室に溢れんばかりの学生達を前に、これからの関学のヴィジョンについて熱弁を振るわれた姿が昨日のここのように鮮やかに蘇ってきます。

最後に、余り知られていない学生時代の平松先生の一面を紹介したいと思います。先生は、中高時代から近くの能勢口教会に通い、西田晃牧師から影響を受けたようです。大学2回生の秋に担当していた教会学校で若人向けの祈りの必要性から、西田牧師に相談したところ、英国の著名な神学者W. パークレーの本を紹介してもらい、それを平松先生が実質的に中心となって翻訳したのが『若人の祈り』（聖文舎）です。しかも、毎週日曜日の中高生の礼拝において、翻訳した祈りを用いてよりわかりやすい表現に変えながら、一年間その作業を繰り返し、完成に至っています。「あとがき」の中で先生は、「祈るということには、こんなにたくさんの内容を盛り込むことができるのかと教えられるだけでも、若い人のための祈りの本としてすばらしいものだと思います」と述べています。この若人向けの祈りの本は、新書版ながら静かな反響を呼んで18版を重ね、全国の教会学校で愛用され続けてきました。学生時代に若人向けの祈りの内容に労苦されていたことは、後のキリスト教主義教育への大きな貢献を考える時、一つの原点がそこにあったのではないかと思います。 【名誉教授、学院史編纂室顧問】

<前頁からの続き>

身体、たくましい精神がそれによって鍛えられなければなりません」ということです。伝統と歴史のある現役とOBの繋がりこそが体育会組織の在り方で、それを支援するのが学校の役目です。学校の決めたルールに従う部だけを「正課外」とするのは如何なものか。関西学院大学体育会は、少数精鋭で多人数の大学に負けない努力をして成果を出すのが本道です。彼が元気なら、「正課外教育」の在り方を含め、関西学院の抱える諸課題を議論したかったと思います。

長い付き合いの中で彼に進言や忠告をしたこともあります。「居心地の良い関学だけには、ぬるま湯で育った世襲議員や経営者と同じ。関学以外のトップ大学に行き『さすが平松先生』と評判になれば、関学の学問的地位を向上させることもできる」と進言しました。また、腰が悪く、歩くのが辛くなっても酒席は断らないので、「酒席を断り、腰の治療に専念したらどうか」と忠告したこともありましたが。時間が無いと言って、腰の治療に専念しなかったのが、結局命取りになったようで残念です。そして、彼が理事長に立候補する前、彼の身体を心配する人達からやめさせて欲しいとの声があり、周囲に迷惑を掛けるので思い留まるよう彼に話をしました。しかし、命を縮めることになっても理事長をやりたいという気持ちが強かったようです。コロナ騒ぎでやりたいことができず心残りだったと思うけれど、安らかにお休みください。合掌。

【1970年商学部、66年高等部、63年中学部卒業】

木村浩造さんは、『関西学院史紀要』第26号(2020年)に「関西学院における大学紛争の歴史—関学革新評議会を中心に—」をご寄稿くださっています。